
~ don't mix danger ~

狂風師

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

↳ don't mix danger ↵

【Nコード】

N06330

【作者名】

狂風師

【あらすじ】

いろんなゲームやら漫画やらアニメやらの世界の主人公+その他の人たちが、ある世界に集められてしまう。 元の世界に帰るには、「ラスボス」を倒さないといけない。

果たして主人公たちは見事「ラスボス」を倒し、元の世界に帰れるのか!?

注意書き。初めてのの方は閲覧必須！！（前書き）

まずは注意書きをよく読もう

注意書き。初めてのの方は閲覧必須！！

この作品は次の注意をよく読み「これくらいクソ小説もどきなら問題ない」と自信を持って言える方のみお読みください。

注意1：大変にカオスな作品です。そういったものが苦手な方は、閲覧をお控えください。

注意2：細かい事が気になるという方は、閲覧をお控えください。

注意3：キャラが著しく崩壊する部分があります。

「そんなもの読んでられるかよ！」という方は、閲覧をお控え（ry）。

注意4：セリフ9割 地の文1割 という小説を破綻させたものです。はっきり言って台本です。

そういったのが苦手な方は、閲覧を（ry

注意5：上記の注意を無視し、何らかの症状（頭痛、吐き気等）が出ましても

一切責任を負うことは出来ません。

不屈の精神、寛大な心、生暖かい眼、をお持ちの方のみどうぞ。

注意書き。初めてのの方は閲覧必須！！（後書き）

壊レタ夏を書いている間に更新していこうかと。

遅筆なので、それまでのお菓子的な存在にでもなったらいいなあ・
・。

なお、下書きが書かれたのは1年ほど前です。7ヶ月くらい使って
書きました。

それでは後ほど、カオスな世界でお会いしましょう……。

don't mix danger } opening (前書き)

don't mix danger 混ぜるな危険。安直なタイト
ル・・・

↳ don't mix danger ↳ opening

ヒュー……ドスン!!

落ちたのは、薄暗い洞窟。

雛苺「いたいのなのー」

魔理沙「まったくだぜ。大丈夫か、霊夢」

霊夢「ええ、大丈夫よ。でも……」

真紅・霊夢「あなた達は誰なの？」

全員「……」

霊夢「と、とりあえず、あなた達は誰？」

真紅「私は薔薇乙女第5ドール、真紅よ。あとは、その他ドールズ
1↳4、6↳7+ よ。あなた達は？」

霊夢「私は博麗霊夢よ。神社の巫女をしているわ。あとは、私の友
達よ」

……沈黙……

霊夢「えっ……えつと……どうやってここに来たの？」

金糸雀「nのフィールドから迷い込んだのかしらー」

水銀燈「そういうことなのよぉ。それで？ そちらのお馬鹿さん達はどこから来たのお？」

霊夢「バ、バカって……。私たちは、ある人（紫）のスキマから落とされてね」

そんな質問が続き、20分後……

魔理沙「そんなことより先に進もうぜ。ここにいっても仕方ないだろ」

翠星石「そーですう。とつとと行くですう」

霊夢「そうね、行きましょ」

一行が歩き出した、その時！

スライムがあらわれた。

蒼星石「……何……これ？」

近づく金糸雀と雛苺。すると！

スライムが襲い掛かってきた！雛苺は2ダメージを受けた。

霊夢「これって・・・」

霊夢・魔理沙「ドラクエ!？」

それを聞いた蒼星石は鉄で切りつけた!

蒼星石「やあああああ!!」

スライムに11ダメージ。スライムはたおれた。

霊夢「やっぱり。全く・・・変な世界に送り込んでくれたわね。次会ったら、張り倒してやるわ」

魔理沙「そんなに嫌か? けっこう楽しいと思うぜ?」

蒼星石「最後の敵を倒せば、元の世界に戻るんじゃないか・・・」

霊夢「そうか、ラスボスね。・・・霖之助さん、っていうところかしら?」

魔理沙「香霖が?」

霊夢「大体ラスボスは男ってというのが相場なのよ」

魔理沙「そんなもんなのか?」

金糸雀「そんなことより、先に進むかしらー」

こうして物語は始まった。

↳ don't mix danger, opening (後書き)

実にセリフが多い。小説じゃないね。

台本の意味がわかったことでしょう。

こんな台本ですが、続けていききたいなど。いや、続けないと間が持たないんですけどね。

↳ don · t mix danger ↳ 1 (前書き)

相変わらずのセリフ大漁。

物好きな方はいいとして、苦手な方は回避推奨。

don't mix danger 1

その後、順調に進んでいった一行。すると、少し明るい広場みた
いなところに出た。

大きさは大体…体育館1つ分くらいだろうか。

霊夢「あ。あそこ見てよ。誰か倒れてるわよ」

近づいて見てみると、男が1人。女が4人寝ていた。

翠星石「やい、お前ら！ 起きるです！！」

？「うん…。？…誰かな？ かな？」

？「何だ…騒がしいな…」

？「ええー！！！！ なんで皆がここに！？」

？「知るかよそんなこと！」

蒼星石「ま、まあ…落ち着いて」

少女達説明中…

10分後

梨花「そういうことなのですか」

沙都子「つまり、ラスボスを倒せばいいのですわね」

ひぐらし部活メンバーが仲間になった。

梨花「さっそく出発なのですよー」

歩き出した一行。そこへ…

ドラゴンが現れた。ドラゴンの先制攻撃。ファイアブレス。全体に24ダメージ。

霊夢「何なのこいつ。やるじゃない」

魔理沙「中ボスっていうやつだろ。それにしても…強いな」

蒼星石「やああああ!!」

蒼星石の攻撃。ドラゴンに5ダメージ。

ドラゴンの反撃。蒼星石に26ダメージ。

蒼星石「くっ…」

翠星石「蒼星石! 大丈夫ですか!？」

心配して駆け寄る翠星石。

蒼星石「強い・・・」

「ミシツ・・・ドオオン!!」

沙都子「おーほっほっほ。かかりましたわね。どうです、私のトラップのお味は」わたくし

ドラゴンはトラップにかかった。12ダメージ。ドラゴンはしばらく動けない。

魅音「さ、全員で・・・かかれー!!」

・・・ドラゴンに139ダメージ。ドラゴンは倒れた。宝箱を落とすて逝った。

梨花「宝箱なのですよー」

梨花は宝箱を開けた。

鈍、金属バット、二丁拳銃、モップ、バクダン、が入っていた。

部活メンバーの装備が変わった。

蒼星石「・・・たくさん入りすぎじゃないかな・・・?」

翠星石「それじゃあ、どんどん進むですう!」

新たな仲間が加わった。これからの旅がさらに心強くなった。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

don't mix danger 1 (後書き)

文章打ってて恥ずかしくなった…。

未だにルビの振り方を覚えてないと言っね。普段から使わないから
だと思っけど。

don't mix danger 2 (前書き)

セリフ大量。そう、それだけ…

その後も順調に進んでいった、と言ったら嘘になる。

戦い方が良くない、だの、どちらの道に行くか、だの、そういうレベルだった。

その度に蒼星石と梨花ちゃんが止めに入った。その後はすぐに仲直りしているのだが…

圭一「この武器は俺のだ！」

霊夢「何言ってるのよ！ 私のに決まってるじゃない！」

圭一「宝箱を開けたのは俺だ！！ だから俺のだ！！！」

霊夢「でも宝箱を見つけたのは私よ！！ 私が見つけなかったら取れなかったのよ！！！」

魔理沙「それじゃ、間を取って私が…」

圭一・霊夢「お前は何もしてないだろ！！！！」

魔理沙「すみません…」

梨花「2人ともケンカはだめなのですよ」

蒼星石「そつだよ、やめなよ」

圭一・霊夢「黙ってて!!!」

梨花「黙るのはそつちよ」

全員、背中に冷水を掛けられた様な感じに陥った。

レナ「梨花…ちゃん？」

梨花「どっちの武器だの何だの、くだらない。見ていて実に滑稽だわ。そんな物どちらの物でもなければいいじゃない」

霊夢「だ、だって見つけたのは…」

梨花「取りたいなら取ればいいじゃない。でも、取ったからには敵と戦ってもらうわよ。」

回復無しの連戦だね。せいぜい屍になればいいわ。取ればいいじゃない、ほら、早く!」

圭一・霊夢「……」

梨花「意気地なし。さっきまでの威勢はどうしたの。そんな事で揉めている暇があったら先に進むわよ。」

その武器は置いていきなさい!」

圭一・霊夢「…はい」

梨花以外「……」

梨花「さあ、進みましょうなのです」

魅音「そ、そうだね。行くっか」

歩き出した一行は、梨花ちゃんこそこのパーティーのリーダーなのだと悟ったとか。

t o b e c o n t i n u e d

↳ don · t mix danger ↳ 2 (後書き)

口調が変わった梨花ちゃん。通称「黒梨花」

見た目と言葉使いのギャップがいいよね。

˘ d o n · t m i x d a n g e r ˘ 3 (前書き)

セリフた (ry)

その後順調に進んでいった…。あれ、このくだり前にどこかで…
まあいつか。

しかし心の片隅には、梨花ちゃんを怒らせてはいけない。そんな
思いが常にあった。

霊夢「何だか退屈ね。敵を倒して進んで、また敵が出てそれを倒
して進んで。また敵が出て（ry）」

魔理沙「いいかげんにしてくれよ…いい加減聞き飽きたぜ」

霊夢「だってえ…正直、飽きたしい…」

真紅「だったら、ラスボスを倒しに進むしかないんじゃないかしら
？」

霊夢「そおだけどお…」

水銀燈「そんなこと言ってる暇があったら、さっさと歩いたらどう
なのお？」

金糸雀「水銀燈の言う通りかしらー」

雛莓「そうなのー」

霊夢「うー…言い返せない…」

翠星石「そんな事よりしんくう…腹減ったですう」

圭一「そう言えばそうだな。何か食べようぜ」

魅音「と言うより、誰か食べ物持ってるの？」

魔理沙「も、持ってないぜ」

梨花「独り占めは良くないのですよ？」

魔理沙「仕方ないな…誰にも渡したくなかったんだが…。さっきそこで拾った茸だ」

魔理沙以外「いらん！！」

雛苺「あつ、ポケットの中にうにゅー（苺大福）が入ってたなの」

雛苺が取り出したうにゅー（苺大福）はカビていて毛だるまでしたとさ。

レナ「うーん…どちらも止めた方が…。他に何か持っている人は…？」

全員「……」

霊夢「訳のわからない茸か。毛だるまの物体か…」

水銀燈「ちよつと、食べる気なの！？ やめときなさいよ」

霊夢「た、食べるわけないでしょ！」（危ない危ない、食べるとい
だったわ）

真紅「どっちをなの？」

霊夢「へっ?」

真紅「あなた今食べようとしていたでしょ。どっちをなの? どっ
ちを食べようとしたの?」

魔理沙「霊夢、お前やっぱり……」

沙都子「で、どちらですか?」

霊夢「わ、わかったわよ。正直に言うわよ。それは……」

霊夢以外「それは?」

霊夢「夢想封印!!!」（梨花ちゃん以外）

梨花「みー。うまく逃げたのですよ」

こうして楽しい旅はまだまだ続くのです。

o n t i n u e d

t o b e c

don't mix danger 3 (後書き)

銀様かわいいよ銀様。

翠星石もかわいいよ翠星石様。

don't mix danger 4 (前書き)

セリフ (ry)

キャラ崩壊に注意。

その後、数分間梨花ちゃんと話していた霊夢だったが、梨花ちゃんに促され気絶している皆を起こす事にした。

魔理沙「勘弁してくれよ…」

真紅「でもまあ私たちも言い過ぎたわね」

皆それぞれ怒ってないようだ。

ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド

物凄い音と共に何かはこちらに向かっていった。

霊夢「な、何なの！？ あれ！」

それは、スライムの大群だった。しかも1000や2000といった数ではない。

あつという間に囲まれてしまった。その中に…

魔理沙「あ、あれチルノじゃないか？」

霊夢「本当ね。でもなんでスライムの中なんかに？ そこまでバカなのかしらね」

すると、紫色のスライムが蒼星石に飛びついた。

蒼星石「うわっ」

圭一「大丈夫か？」

心配して近づくと圭一。

蒼星石「……………」
「ブンッ!!」

蒼星石の攻撃。圭一はひらりとかわした。

圭一「何すんだよ、蒼星石!!」

蒼星石「……………」

霊夢「そうか、このスライム、くっついて体の自由を奪うのね」

蒼星石「……………」

14 VS いっぱい

魔理沙「くそっ、数が多すぎる。マスタースパーク！」

それでも減ったようには見えない。その時

蒼星石「みんなもスライムに取り憑かれたらどう？ 気持ちいいよ。疲れないし、力がみなぎってくる。」

それに、とても解放的な気分になれるんだ。心配ないよ、

don't mix danger 4 (後書き)

キャラ崩壊っていいよね。

ギャップがry

書きやすいし(笑)

don't mix danger 5 (前書き)

ゼリ)ry

引き続きキャラ崩壊に注意。

ダンッ!!

銃弾が蒼星石の腕をかすめた。

蒼星石「くっ！ 誰だ!!」

葛西「通りすがりの助っ人でも申し上げましょうか。それより大丈夫ですか、お嬢さん」

翠星石「ひいい。怖いですう……」

魅音「葛西さん！ なんでここに!？」

葛西「ちょっとした用事と申しますか…落とされたと申しますか」

魅音「落とされた?」

霊夢・魔理沙「……」

蒼星石「いつまでも喋りやがって。俺の存在を忘れるなあ!!」

ぷしゅー（催涙ガス）

蒼星石「ぐわああああ」

葛西「そんなことよりこのスライムたちをどうにかしましょうか。皆さん、目を瞑って伏せていてください」

葛西「…よろしいですか？」

その間、僅か数秒。

葛西「もうよろしいですよ」

起きて見てみると、スライムたちは綺麗さっぱりなくなっていた。

魅音「か、葛西さん、何したの!？」

葛西「魅音お嬢様でも、それは教える事は出来ません」

蒼星石「あ…あれ…僕は何を…?」

翠星石「蒼星石!! 元に戻ったんですね!」

蒼星石「えっ? う、うん…」

葛西「良かったですね。それでは、また」

魅音「どこに行くんですか? 一緒に旅はしないんですか?」

葛西「すみません、魅音お嬢様。前にも言いましたように用事があるので」

魅音「そっか…じゃあ仕方ないね」

葛西「またいつか会えますよ。では」

葛西はパーティーから離脱した。

蒼星石「さっきの人は一体…」

翠星石「蒼星石の命の恩人ですう」

真紅「それにしてもよかつたじゃない」

蒼星石「??？」

こうして無事、蒼星石『は』助けられました。

t o b e c o n t i n u e d

don't mix danger 5 (後書き)

蒼星石は弄られキャラ的存在。勝手な想像。

葛西さんはひぐらしの中で結構好きなキャラです。優遇します(笑)

Second - t Mix d a n g e r s 6 (前書)

try

その後順調に…もういいやこのくだり。時折、蒼星石が狂いだす事があったが、最近はあまりならなくなった。

霊夢「……………やっぱり暇ねえ」

霊夢（偽）「何か起こらないかしら」

全員「霊夢が2人!？」

霊夢「な、なんで私が」

霊夢（偽）「こ、こっちのセリフよ」

雛莓「どうなってるのなのー？」

すると霊夢（偽）が消えた。そしてどこからか声が聞こえる。

？「ふふ…楽しかったわ」

圭「そ…その声は」

？「こんにちは、皆さん」

魅音「ど、どこにいるの!？」

すると目の前にいきなり人が現れた。

全員「うわっ!!」

?「楽しそうね、あなたたち」

レナ「鷹野さん!!」

鷹野「どう? 私の幻術は? 面白かった?」

レナ「げ、幻術?」

鷹野「そうよ。さっきのもう1人のあなたがいきなり現れたのも、あなた達全員に幻術をかけたからなの」

魅音「へえー、鷹野さん幻術使いだったんだ」

鷹野「あくまでも、この世界だけでね。幻術使って敵にダメージを与えられるわよ」

おおなめくじ「があらわれた。」

鷹野の攻撃。鷹野は幻術を使った。おおなめくじに76ダメージ。

おおなめくじは倒れた。

霊夢「すごい。敵が真っ二つになったわ」

圭一「それに詠唱時間がほとんどない。まるで無詠唱だ」

鷹野「ふふ、褒めても何も出ないわよ」

圭一と魔理沙は2000Gを貰った。

t o b e c o n t i n u e d

don't mix danger 6 (後書き)

鷹野さんもかわいいよね。好きよ。

don't mix danger 7

雛苺「あ！ 誰か来たなのー」

魅音「敵？」

蒼星石「あ、あれって…」

真紅「ジュン！！」

JUN「……」

JUNが現れた。

魔理沙「なんか怪しくないか？」

JUNの攻撃。魔理沙はひらりとかわした。

魔理沙「おわつと。やっぱり敵か！」

魔理沙の攻撃。JUNは攻撃を弾いた。

真紅「やめて！ 二人とも！」

魔理沙「なんでだよ、あいつは…」

真紅「私のミーディアムだわ」

圭「な、なんだってー！！」

真紅「…貴方、わかってるの？」

圭一「いや全然」

真紅「…。まあいいわ。それよりジユンを何とかしないと…」

JUNは仲間を呼んだ。ZUNが現れた。

ZUNの攻撃

ZUN「…」

圭一は45ダメージを受けた。

圭一「がはっ。な、なんだとコノ野郎！」

圭一の反撃。ZUNはひらりとかわした。

霊夢・魔理沙「な、なんでお前まで！」

真紅「そちらのお知り合いかしら？」

魔理沙「知り合いも何も…えっと…つくっ…」

霊夢「それ以上は言うな。まあ、とにかくそういつ事よ」

圭一「それはいいから、早くどうにかしよつぜ。俺だけやられてるじゃねえか！」

圭一の攻撃。ZUNに5ダメージ。

ZUN「……」

圭一「っつ、強い……」

こうして彼女（彼）らの戦いが始まった。

t o b e c o n t i n u e d

don't mix danger 7 (後書き)

圭「つ、強い…」

作者「いや、お前が弱い」

JUNの攻撃。圭一は30ダメージを受けた。

ZUNの攻撃。圭一は30ダメージを受けた。

圭一「いつてえー…。つてかなんで俺だけ!? なんで俺だけ攻撃されるの? お前らも攻撃されるよ!」

けいいち は こんらんしている。

鷹野「ギャーギャー言ってる人は置いといて。真面目に強いわよ。どうするの?」

霊夢「そうね…とにかく倒すしかないんだろうけど」

魔理沙「そんな事言ったって強いぜ、あの二人」

雛莓「こわいのなのー」

金糸雀「ぜ、全然怖くなんかないかしら!」

JUNの攻撃。魔理沙は26ダメージを受けた。

ZUNの攻撃。蒼星石は31ダメージを受けた。

魔理沙「あーもう! やるっきゃないだろ! マスタースパーク!」

JUNに86ダメージ。ZUNに14ダメージ。

魔理沙「何！？ ZUNに効かない！？」

圭「あははは。何やってんだよ、バカみてーだな！」

けいいち は こんらんしている。

魔理沙「んだと！ お前なんか、ただチャランポランなだけじゃないか！」

蒼星石「ふ、二人とも。敵が目の前にいるのに止めなよ」

水銀燈「私が相手をしてあげるわぁ」

水銀燈の攻撃。JUNはひらりとかわした。ZUNは42ダメージ。

水銀燈「くっ。ただの人間のクセに。いいわ、ジャンクになりなさい！！！」

水銀燈の連続攻撃。JUNはひらりとかわした。ZUNは50ダメージ。

レナ「レナも行くんだよ。だよ」

レナの攻撃。JUNは71ダメージ。ZUNは75ダメージ。

真紅「何でこんなにダメージに差があるのかしら？ ただの偶然？」

魅音「レナの攻撃が両方に効いたのに、マスタースパークのダメージがあんなに差がつくのは、おかしいんじゃないかい？」

真紅「もしかして……。あの二人は違う世界から来た。JUNは私たちの。そしてもう一人は霊夢や魔理沙からの」

霊夢「それで？」

真紅「つまり、攻撃のパターンや回避方法はわかっているから、受け流す事が出来る。だからダメージも少ない」

魅音「でも違う世界から来た者の攻撃は避けようがないって事！」

霊夢「だからレナの攻撃は二人に効いたというわけね」

魅音「よし、それじゃあ。反撃開始！！」

t o b e c o n t i n u e d

don't mix danger 8 (後書き)

え？ なんで圭一の攻撃は効かないかって？

A・弱いから(笑)

少女戦闘中・・・

魔理沙「マスタースパーク!!」

水銀燈「ジャンクになりなさい!!」

魅音「くらえー!!」

JUNは攻撃を受け流した。ZUNは華麗にかわした。

魔理沙「なんだって!? もう避けれるようになったのかよ!」

真紅「早い。まさかとは思っていたけど、これほどまでに応用能力が高いなんて…」

鷹野「それじゃあどうするの?」

真紅「…なんで貴女は戦っていないの?」

鷹野「何だか嫌な予感がするのよね」

状況は悪くなる一方だった。相手はたったの二人。なのに、技を覚えられてからの戦いは、完全に劣勢。

真紅「つべこべ言わずに戦いなさいよ」

鷹野「言われなくとも」

JUNは63ダメージ。ZUNは67ダメージ。

真紅「流石ね。攻撃がよく通るわ」

鷹野「それは褒めてないわよ」

鷹野の渾身の一撃。JUNは120ダメージ。ZUNは132ダメージ。

JUNとZUNを倒した。

JUN「…」

ZUN「…」

二人は鷹野に近づいた。そして突然。二人は自爆した。

魅音「鷹野さん！！ 真紅！！」

真紅はひらりとかわした。

レナ「鷹野さん！？」

鷹野「私はもう…ダメね。あなた達…がんばり…なぞ…い…」

鷹野は息絶えた。

全員「鷹野さああああん!!」

旅の辛さを味わった戦闘だった。

t o b e c o n t i n u e d

don't mix danger 9 (後書き)

鷹野さんは安らかに眠りました…。物語的にも…。ね。

作者の事情。

↳ don't mix danger ↳ 10 (前書き)

物語は全く進みません。

いわゆる作者のぼやき。読み飛ばしても影響ありません。

辛く悲しい出来事をいつまでも悔やんでるわけにはいかない。

圭一の混乱も直り、一行は先へ進んでいた。

沙都子「そういえば最近、私の出番が無いんじゃないでしょうか？」

全員「……」

梨花「みー。それは禁句なのですよ」

沙都子「そういう梨花だって、『全員』のところ以外、キノコと毛だるまのやつから出ていませんでしょ」

梨花「僕は気にしてないのですよ。にばー」

翠星石「翠星石も、あのグラスン髭の時から喋ってねーですうー」

魅音「ああ、葛西さんね」

翠星石「やい作者。一体これはどーゆー事ですか！ 隠れてねえで出て来やがれですー！」

作者「はい、すみません。先に謝ります。本当にごめんなさい」

沙都子「そんな事はいいですから、どうしてなんですの？」

作者「それは…その…何て言うか…」

翠星石「はつきり言えです!!」

作者「……忘れていました…」

翠星石「こんのバカ! グズ! 翠星石を忘れるなんて、とんでもねー奴です!」

作者「すみません…。登場人物が増えるとどうしても…」

沙都子「そんな言い訳は聞きたくありませんわ」

作者「すみません…。これからは出来る限り使わせてもらいます…」

翠星石「当たり前です! バシバシ使ってもらってます!」

レナ「ずるーい。レナ達も忘れてもらっちゃ困るんだよ。だよ」

魔理沙「そっだぜ」

作者「はい、もちろんです。忘れずにがんばりたいと思います」

真紅「はあ、全く…。何なのこれは…」

蒼星石「作者の自重の時間だね」

霊夢「ネタが無いだけじゃない?」

作者「う……」

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

「むらあしせ」（複製）

↳ don't mix danger ↳ 10 (後書き)

沙都子ファン、梨花ちゃんファン、翠星石ファンの皆様すみません
でした。

これから本気出す！ いやでも明日からでも…。

don't mix danger 11 (前書き)

知恵 ひぐらしの学校の先生

海江田 ひぐらしの学校の校長先生

・・・漢字は間違っていないはず。

一行は旅を続け、一つの村を見つけた。

魔理沙「おっ、村があるぜ。なにに・・・オーエン？ オーエンっていう村らしいぜ」

霊夢「やったわ。ちゃんとした所で休めるなんて久しぶりね」

レナ「よかつたんだよ。だよ」

村の中へ入っていく一行。すると...

知恵「ようこそ、オーエンへ」

海江田「ゆっくりしてってください」

魅音「ち、知恵先生！ それに校長先生まで！」

知恵「あれ？ 何で私の名前を...。どこかでお会い...」

海江田「失礼ですが、どこかでお会いしましたか？ 初対面とは思えなく」

圭「記憶が無いんですか...」

沙都子「記憶を忘れていただけでしたら、ショックで思い出すんじゃないありません？」

梨花「みー。だからってトラップはダメなのですよ」

魅音「それじゃあ、知恵先生たちはいつからここにいますか？」

知恵「いつからって・・・あれ・・・ああー・・・」

レナ「ち、知恵先生!？」

海江田「どうやら気を失ってしまったようですな」

圭「どーしたら記憶を戻してくれるんだよ」

翠星石「原因を聞き出せばいいですう！」

圭「いやいや、それが出来ないから苦労してるんだろ」

魅音「じゃあ何か最近、変わったことはありますか？」

海江田「そうですね…。あちらの湖の向こう側の城から、モンスターが時々村を荒らしていきます。その時に村人を何人か連れて行かれて…。抵抗したら殺されます。それはもう、殺された後、村の入り口に晒されて…」

魅音「うーん。そのお城に何か原因があるのかな？」

真紅「まあ、城に行けばいいじゃない。別にすることもないんだし」

海江田「あの城に行くと言うのですか。なら、この村で休んで言うてください。あそこには、とても強い魔物がたくさん潜んでいます」

「靈夢」言われなくてもそのつもりよ

「魔理沙」ゆっくりしていくぜ

「蒼星石」道具も買っていないとね

t o b e c o n t i n u e d

don't mix danger 11 (後書き)

知恵先生放置(笑)

書いてる間に知恵先生のこと忘れてぜ!

↳ don't mix danger ↳ 12 (前書き)

元治 蒼星石のマスター (アニメ版)

芝崎元治って言うんだね。

一行は道具を買うべく、道具屋にやって来た。

ガチャ。

元治「いらっしや・・・」

蒼星石「マスター！！」

元治「かじゆきいー！！」

蒼星石「マスター！！」

元治「かじゆきいー！！」

蒼星石「マスター！！」

元治「かじゆき・・・」

魔理沙「うるせえ！！」

何かあったようですが、とりあえず道具を買い揃えた一行。

次に向かったのは宿屋。

のり「いらっしやませー」

真紅「のりじゃないの。どうして」…聞くまでもないわね」

入江「いらっしやい。…沙都子ちゃん。私だけのメイドに」

沙都子のトラップ発動。

ガンッ

沙都子「来ないでくださいまし！」

圭「監督は記憶があるのか？ そのまんまじゃねーか」

入江「ところであなたは誰です？ さては沙都子ちゃんの事を奪いに来たんですね！ 沙都子ちゃんは渡しませんよ！」

圭「なんで沙都子のことだけ覚えてて、俺達のことには覚えてないんだよ」

入江「いきますよー」

ガンッ ゴンッ ガシャーン！

梨花「みー。ナイストラップなのですよ」

入江「きゆうっ…」

入江を倒した！

のり「どうぞっ！ゆっくり」

一行はしばらく休むと宿屋を出た。お城に向かおうとした、その時。

村人C「モンスターが出たぞー！」

霊夢「な、なんですって!?!」

魔理沙「よしちょうどいい。ぶっ飛ばしてやるっぜー！」

魅音「おー!!」

t o b e c o n t i n u e d

don't mix danger 12 (後書き)

これ打ってて思った。「壊レタ夏」とクロスオーバー出来るんじゃない？

自分の作品でクロスオーバーさせてみようかな。誰の許可もいらないし。

思い立ったらすぐ決行。やってみよう。番外編として。

↳ don't mix danger ↳ 13 (前書き)

注意：作者は擬音語・悲鳴が苦手です。ご理解の上お読み下さい。

えっ？ 注意するのが遅い？

村人D「ぐわあっ！」

村人E「うわあ！」

村人F「く、くそっ」

村人G「っ、強すぎる…」

霊夢「あれね！」

蒼星石「大丈夫ですか？」

魅音「後は私たちに任せてください」

オークが現れた。

真紅「数はおおよそ20つととこね」

魔理沙「楽勝だぜ！ みんな離れろ！」

サッ

魔理沙「巻き込まれても知らねえぜ！ マスタースパーク!!!」

ドガガガガガガガガガガガガ

魔理沙「終わったぜ！」

そして土煙が収まると…

魔理沙「な、なんだと・・・」

そこには一体のオークが、何事も無かったかのように仁王立ちしていた。

魔理沙「な、なぜだ！ 確かに当たった…当てたはず…」

霊夢「当たっていたわよ」

魔理沙「じゃあなんで…」

真紅「あのオーク、とんでもない力を感じるわ」

オークの攻撃。圭一は78ダメージ。

圭一「ぐわあああ!!！」

沙都子「圭一さん！」

梨花「大丈夫なのですか？」

圭一「あ、ああ。こんなの全然…平気…だぜ…」ほっげほっ…」

レナ「ダメだよ無理しちゃ。圭一君は休んでて」

魅音「よくも圭ちゃんを！」

魅音の攻撃。オークに3ダメージ。

オーク「・・・」

魅音「くっ」

翠星石「ぜんぜん効いてねーですう」

真紅「強いわね」

t o b e c o n t i n u e d

↳ don't mix danger ↳ 13 (後書き)

ドレディアかわいいよドレディア。

え？ だって書く事ないもん(笑)

don't mix danger 14 (前書き)

ついにあの人登場！

ひぐらしのあの人だよ！ やったね！

それから、蒼星石に注意。いろいろと。

翠星石「蒼星石いー！ー！！！」

圭一「よ、よくも蒼星石を！ー！」

霊夢「待って。このまま戦ってもダメよ。返り討ちにされるだけ」

圭一「じゃあどうすれば……！」

梨花「……羽入……」

羽入「はいです。わかっていますですよ、梨花」

梨花「お願い」

羽入「ザ・ワールド」

羽入のザ・ワールド。時が止まった。

羽入「ザラキ」

羽入はザラキを唱えた。オークは息絶えた。

羽入「ザオリク」

羽入はザオリクを唱えた。蒼星石は蘇った。

そして時は動き出す。

魔理沙「あ、あれ？ オークが死んでるぜ？」

翠星石「蒼星石が蘇ってるですう！」

霊夢「一体どういふこと…？」

梨花「みー。きっと神様が助けてくれたのですよ」

一行は頭の上に疑問符を浮かべながら、お城目指して歩いていきました。

t o b e c o n t i n u e d

don't mix danger 14 (後書き)

最初で最後の羽入の登場シーン！

もしかしたら、また出るかも？

don't mix danger 15 (前書き)

トミ一 富竹

一行は林を抜け、湖を抜け、お城の前にやってきた。

途中、蟲を使う妖怪やバカな妖精に出会ったが、とりあえずスル
！。

お城の外壁は一面に紅く、とても大きかった。

霊夢「これって…」

魔理沙「紅魔館そっくりだな」

トミー「やあ、みんな。僕はみんなのトミーだよ」

全員「…」

トミー「どうしたんだい？僕はみんなのトミーだよ」

全員「…」

トミー「そんな顔しないで。僕はみんなのトミーだからね」

全員の総攻撃。トミーに892ダメージ。

トミー「がはあ…！…でも僕はみんなのトミーだよ」

真紅「な、なんですって！ あの攻撃を受けてまだ生きてるの！？」

トミー「ははっ。だって僕はみんなのトミーだからね」

魔理沙「うぜえ……」

魅音「キモイ」

トミー「キモイなんて言わないで。僕はみんなのトミーだからね」

翠星石「うるせーですう！！」

翠星石の攻撃。トミーに76ダメージ。

トミー「グフウ……でも僕はみんなのトミーだよ」

水銀燈「あーもう。うるさい！ ジャンクになりなさい！！」

水銀燈の攻撃。トミーに91ダメージ。

トミー「ガハッ……。でも僕はみんなのトミーさ」

圭「ああウゼエ……」

沙都子「何とかしてくださいまし。これじゃあお城の中に入れませんわ」

トミー「なんだい君たち、この中に入りたいのかい？」

梨花「そうなのです」

トミー「お安い御用さ！」

ギイイイ…。重たい音を立てて扉が開いた。

トミー「また会いに来てね。僕はみんなのドナ…トミーだからね」

ド　ドみたいな富竹に会った一行。

そんな奴は置いて、ついにお城の中へ入った。

t o b e c o n t i n u e d

↳ don't mix danger ↳ 15 (後書き)

フリーゲームのイストワールが楽しすぎる。

シェーラかわいい。

お城の中に入っていった一行。外壁もそうだったように、中も一面に紅い。

霊夢「もう紅魔館確定ね」

魔理沙「だな。このままだと図書館もありそうだぜ」

しかし、紅魔館とは明らかに違うところが一つ。

霊夢「埃が落ちてる…」

魔理沙「あの紅魔館とは違うってことだな」

どんどん進んでいく一行。もちろん敵もいたが、まあ、そこら辺のザコ程度だろう。

するとそこへ…

クツパ「ガッハッハッハ！ ここから先へは通さないのだ！！」

クツパ、クリボー×5、パタパタ×5 が現れた。

霊夢と魔理沙の弾幕。クツパは128ダメージ。クリボーは息絶えた。パタパタは息絶えた。

クツパ「グガー！ まだじゃい！！」

クツパの攻撃。魔理沙はひらりとかわした。

魔理沙「遅い、遅いぜ」

沙都子のボムトラップ。クツパは414ダメージ。

沙都子「あら、ボムがお好きなようで」

霊夢「宝符「踊る陰陽玉」」

霊夢の攻撃。クツパは334ダメージ。

魔理沙「邪恋「実りやすいマスタースパーク」」

魔理沙の攻撃。クツパは638ダメージ。

パチュリー「日符「ロイヤルフレア」」

パチュリーの攻撃。クツパは309ダメージ。

水銀燈「ジャンクになりなさい！」

水銀燈の攻撃。クツパは279ダメージ。

クツパは倒れた。

魔理沙「……パチュリー？」

パチュリー「そうよ……むきゅー」

翠星石「先に進むですー」

魔理沙「あ、ああ」

いろいろ混ぜたが、先に進んでいった一行。

d えーっと、書く事も無いので t o b e c o n t i n u e

don't mix danger 16 (後書き)

疲れた。いろいろあった。クソ疲れた…。

クツパを倒した一行。

少女達進軍中……

真紅「どうやらここみたいね」

そこには鉄製らしき巨大な扉があった。今入る場所は、とても薄暗い。

その暗さのせいで、扉がとても重たく感じる。

霊夢「…開けるわよ」

霊夢はグツと力を入れて扉を押しした。

霊夢「くっ…重たい…。ビクともしないわ」

さらに力を加える。

圭「俺も力を貸すぜ」

魅音「私だつて」

蒼星石「僕も」

沙都子「私達もいきますわよ」

梨花「みー。がんばるのですよ」

みんな一斉に押した。しかし扉はビクともしない。

真紅「この扉、押すんじゃないくて引くんじゃない？」

・・・バカである。

そして案の定引いてみると、扉がギイイイイという音を立てて…開かなかった。

霊夢「開かないじゃない」

真紅「おかしいわね…。『押してだめなら引いてみな』というくんくんの言葉が…」

魔理沙「なあ、扉に何か書いてあるぜ」

『この扉は移転しました。右の通路を進み、突き当りを左に曲がってください』

全員「・・・」

一行は無言で指示に従い進んでいった。そこに…

『引つかかったな！ ざまあ！…！』

プツンッ

魔理沙「マスターースパーク！！！！」

扉は爆音を立てて崩れ去った。

魔理沙「けっ」

その先に待っていたのは…

t o b e c o n t i n u e d

don't mix danger 18 (前書き)

キャラ崩壊注意

魅音「葛西さん!」

葛西「おやおや、来てしまいましたか」

魅音「な…なんで…なんで葛西さんが…?」

葛西「この城の主だからです」

魅音「じゃあ何で村を襲ったりなんかしたんですか! あんな酷いこと…」

葛西「私の趣味です」

魅音「つ!! なんで…なんで…!」

魅音の怒りの攻撃。しかし、葛西にダメージを与えられない。

葛西「やめてください。魅音お嬢様と戦うつもりはありません」

魅音「うるさいうるさいうるさい!」

葛西「やめてください。それ以上攻撃をするのであれば、こちらも応戦しなければなりません」

魅音「うあああああ!」

圭一「やめる魅音！ スライムの時の事、忘れたのか！」

魅音「そうだ…。あの時は助けてくれたじゃないですか」

圭一「いや、そっちもあるけど、強さの方を」

魅音「強さ？」

圭一「ああそうだ。あの時…」

葛西「かかりましたね！ やってしまいなさいオーク達！」

周りにはすでにオークに囲まれていた。

真紅「図ったわね！！」

葛西「ずっとこの好機を待っていたのですよ。ふふふ…」

魔理沙「くっ。完全に囲まれてるぜ。どうするよ」

霊夢「やるしかないでしょ。来たわよ！」

オークの攻撃。魔理沙は87ダメージ。

魔理沙「やったな！ このヤロー！」

魔理沙の攻撃。オークは5ダメージ。

魔理沙「こゝ、こゝつら…」

葛西「無駄ですよ。そのオーク達は、私がある方と一緒に違法改造した、特別なオーク達です。今のあなた達に勝ち目はありません」

真紅「くっ…」

はたして一行は勝つことが出来るのか！？

e c o n t i n u e d

t o b

トミー「待ったあ！ 僕が来たからには、もう安心さ。だって僕はみんなのトミーだからね！」

圭「富竹さん！ 来てくれたんですか！」

トミー「もちろんさ！」

トミーの攻撃。

トミー「富竹フラッシュュ！！」

オーク全体に死の光。オーク達は息絶えた。

トミー「楽勝さ！」

葛西「ふふふ…まあよい。計算の内だ」

ダンッ！（銃声）

トミー「あらあ〜。じゃ、じゃあね。でも僕はみんなのトミーだからね」

魅音「ありがとう富竹さん」

翠星石「次はおめーの番ですー！」

葛西「いいでしょう。私が相手になります」

圭「いくぞ、みんな！」

その間、僅かに二秒。

全員「うわあああああああ！！！！」

何が何だかわからない。

葛西「安心してください。命までは取りません」

圭一「う……ん……。ここは……？」

真紅「城の外みたいね」

圭一「そっか…俺達…負けたのか」

霊夢「仕方ないじゃない。あいつ強すぎよ。チートじゃないの」

蒼星石「これからどうしようか？」

レナ「とりあえず、村に戻って見たらどうかな？」

真紅「そうね」

霊夢「でも、村に戻ってどうするの？ オークの事件が解決したわけじゃないのに」

真紅「じゃあどうするの？」

霊夢「それは……」

真紅「決まりね」

葛西さんの力に、全く歯が立たなかった一行。彼がこの世界のラスボスなのか！？

t o b e c o n t i n u e d

↳ don't mix danger ↳ 20 (前書き)

今回も今回で、読む必要なし。

読みと出してもらっても、ストーリーに影響はありません。

作者「はい、やって来ました。作者です」

翠星石「またやって来たですね！」

作者「はい。またやって来ました、作者の自重タイム」

霊夢「で、今回は何？」

作者「えーっとですね。竜宮レナさんの出番の方が少し…」

レナ「レ、レナは気にしてないんだよ。だよ」

作者「そうですね？ それならいいんです。元気、取り戻しました」

魔理沙「ところで、富竹と葛西の強さは何なんだ？ 富竹は死なないし、葛西は全体的に強いし」

作者「あの二人は、霊夢さんの言われた通りチートキャラです」

霊夢「具体的には？」

作者「富竹：死なない能力 葛西：全能力MAX です」

蒼星石「何であの二人なんですか？」

作者「それは、私と友人が一人ずつ鼻屑しているからです。言わば、

お気に入りですね」

圭「他にチートキャラはいるのか？」

作者「海江田ですかね」(笑)

霊夢「ふーん。で、今までに、何のゲームやらアニメやらが混じってたの？」

作者「東方project ひぐらしのなく頃に ローゼンメイデン ドラゴンクエスト ポケットモンスター

ドナルド ひぐらしデイブレイク スーパーマリオ ファイナルファンタジー

灼眼のシャナ 三國無双 デスノート
くらいですかね」

翠星石「こんなにたくさん混じっていたんですか……」

蒼星石「今聞いただけで、ざっと12作品」

霊夢「カオスね」

作者「まあ、気付かずに使っている作品もあるかも知れませんが……」

魅音「ダメ元で聞いてみるけど、ラスボスは誰？」

作者「それはまだ言えません。しかし、一応決まっています。もちろん、チートキャラです」

霊夢「勝ち目がないじゃない!」

作者「がんばってくださいね」。それでは

t o b e c o n t i n u e d

don't mix danger 20 (後書き)

上に挙げた12作品、全て見つけることは出来たでしょうか？
ポケモンはわかりにくいかと。

それっぽいキャラ、キャラのセリフ、魔法、アイテム、世界観、全
て含むので、見つけたあなたはすごいと思います。

雛苺、金糸雀、水銀燈は出番が激減します(しています)。

なので、好きな方で、それを不快に思う方は、この先に進む事は
推奨しません。

don't mix danger } 21 (前書き)

☐ 内は看板の内容

村人C「おかえり。どうだった？」

全員「……………」

村人E「もしかして、ダメだったの？」

一行は頷いて見せた。

村人「…」

村人D「落ち込むことない。敵が強かったんだろ？」

霊夢「ええ…あれはチートよ…」

村人F「ち、ちーと？」

魔理沙「そこら辺はあまりつつこまないで欲しいぜ…」

村人「……………」

全員「……………」

沈黙…。

村人E「そ、そういえば、ここから西に進めば洞窟があつて、それを抜けると隣の大陸に行けるわよ」

圭一「ああ、ありがとう…」

再び沈黙…。

梨花「では、その大陸に行ってみましようなのです」

魅音「そ、そうだね。ここでじっとしててもいけないし」

村を出た一行。しばらく歩くと、看板が立ててあった。

霊夢「まさか…」

『引つかかってやんの!!』

『何でこんなところ来てんの？ バカみたい』

レナ「……」

ブンツ バキツ（看板破壊音。鉈使用）

魅音「…村に戻ろうか」

圭一「ああ」

魔理沙「ぶっ殺す…」

霊夢「…」

t o b e c o n t i n u e d

don't mix danger 21 (後書き)

若干キャラ崩壊があつた？ 何の事かワカラナイナア。

村に戻ってきた一行。いや正確には、村が『あったであろう場所』に戻ってきた、という方が正しい。

霊夢「な、何よこれ!？」

真紅「何にもないわね」

そう。村は跡形もなく消えていた。

圭「じゃ、じゃあさっきまで俺達がいた場所は何だったんだよ！」

蒼星石「これだけ綺麗に何も無いと、初めから無かったみたいだね……」

梨花「ふしぎ不思議、なのですよ」

全員「……」

魔理沙「で、これからどうするんだ?」

霊夢「うーん…そうねえ……」

その時、地面が突然に消えた。

一行が驚く暇も無くヒュー…と落ちていき…。

魔理沙「いてててて…。また紫だな」

圭「どうやらみんなとはぐれたようだな」

雛苺「そうなのー」

魔理沙たちは密林の中、三人になった。

一方、霊夢たちは。

霊夢「まったく…紫は…」

真紅「そんなことよりどうするの？ 何人かいないわよ」

レナ「あ、ホントだ。圭くんがいない」

蒼星石「雛苺もないよ」

霊夢「こっちは魔理沙ね」

翠星石「暑いですう……」

霊夢たちは砂漠に落とされ、他の三人を探す事にした。

霊夢「と、言っても……どうやって探そうかしら」

魅音「とりあえず歩くしかないんじゃない？」

霊夢「どっちに？」

ここは砂漠。見渡す限りの砂、砂、砂。

全員「……」

真紅「さ、行きましょ」

t o b e c o n t i n u e d

don't mix danger 23 (前書き)

キャラ崩壊があります。

ただし、キャラ崩壊がいつも黒くなるとは限りません。

紫の仕業で2班に別れてしまった一行。

魔理沙班。

圭「とにかくどっか行こつぜ」

雛苺「いくなのー」

魔理沙「そうだな」

歩き出した一行。しばらく歩くと、1つの家を見つけた。2階建ての家だ。

その家から、何やら声が聞こえてくる。

？「ドラえもん。助けてよ〜」

？「ダメだよのび太君。自分の力で何とかしないと」

圭「『どうやら』『ドラえもん』って人と『のび太』って言う人がいるらしいな」

魔理沙「とりあえず、その人たちに話を聞いてみるか」

雛苺「そうなのー」

家に近づく3人。

ピンポーン・・・ガチャ

のび太「はい。どちら様です?」

圭一「あの、道に迷ってしまったんです。ここはどこですか?」

のび太「そうですか。ここは『名も無き密林』です。ここのモンスターは強いですから…って、うわああああ!」

?「見つけたぞのび太! 今度こそギツタンギツタンにしてやる!」

のび太「うわあああー!!」 バタンッ!

?「逃げるなコノヤロー!!」

圭一「おいおい、イジメは良くないぞ」

?「なんだ、お前らは? 見かけない顔だな。何でもいい! 俺は今ムシヤクシヤしてるんだ。誰でもいいから殴らせるお!」

?が襲い掛かってきた。

?の攻撃。圭一は華麗にかわした。

圭一「おいおい、そんな攻撃じゃ当たらないぜ。それに自分の名前くらい言ったらどうだ」

？「俺はジャイアン」

ジャイアン「プロ並みの歌手だ」

ジャイアンの攻撃。圭一はひらりとかわした。

圭一「無駄だぜ」

圭一の攻撃。ジャイアンはひらりとかわした。

ジャイアン「そっちこそな」

魔理沙「……」

雛莓「がんばれなのー」

二人の戦いは続く・・・かも。

t o b e c o n t i n u e d

don't mix danger 24 (前書き)

引き続きキャラ崩壊。

ただし (ry

ジャイアン「はあ…はあ…。なかなかやるじゃないか」

圭「はあ…はあ…そっちこそ」

ジャイアン「だがな、まだまだあめえぜ」

ジャイアンのスタミナが回復した。

圭「なん…だと…」

ジャイアン「これが俺の能力だ。いくぞ!」

圭「くっ…」

のび太「こっちです!」

圭「達は家の中に逃げ込んだ。」

ボタンツ ガチャ（言うまでも無いが鍵をかける音）

ジャイアン「おい! 逃げるな!」

圭「ふう…危なかったぜ」

雛苺「つかれたなのー」

魔理沙「私達は何もしてないけどな」

のび太「あいつはこの密林で一番強い奴なんだ。いつも追われてる時はドラえもんが助けてくれるんだ」

魔理沙「その『ドラえもん』ってどんな人なんだ？」

ドラえもん「やあ、ぼくドラえもん」

魔理沙・圭一・雛苺「『青たぬき!!』」

ドラえもん「僕はたぬきじゃない！ 22世紀から来たネコ型ロボットだ!!」

圭一「どう見たってたぬきじゃないか」

のび太「はいはい、お約束は置いといて。ドラえもん、何とかしてよぉ。これじゃあ家から出られないよぉ」

ドラえもん「うるさいなあ…」

ドラえもんはのび太を持ち上げると…

ドラえもん「自分で何とかしろやああ!!」

2階の窓からポイ。のび太を放り投げた。

のび太「ああああああ…」

ジヤイアン「待ってたぜえ、のび太あ！」

ドラえもん「後で報酬忘れるなよ」

ジヤイアン「わかってるって」

ドス黒いドラえもんでした。

t o b e c o n t i n u e d

その頃砂漠では…。

翠星石「喉が渴いたですう…」

真紅「そうね」

霊夢「喉渴いたわ…」

蒼星石「そうだね」

魅音「のどかわいたよー」

レナ「そうだね」

霊夢「…なんでみんなそんなにクールでいられるの？」

真紅「何でって、そんなに騒いでどうするの？ バカみたいに」

霊夢「うっ…それは…。…だって暑いんだもん！」

真紅「暑いからって「暑い」「暑い」言ってどうするのよ。涼しくなるわけでもないのに。もう少しまともな事言ったら？ バカ犬」

霊夢「何だかその話し方、聞いたことがあるような…」

翠星石「ヒィィ…真紅が壊れたですう」

真紅「誰がコワレタって!？」

蒼星石「真紅、落ち着いて」

真紅「誰がもちつけて!？」

レナ「ついに真紅ちゃんがボケキャラに…」

真紅「ボケてなんか無いわよ!」

魅音「くぁwせdrftgyふじこlp…@」

20分後

蒼星石「大丈夫？」

真紅「ええ、もう大丈夫よ。暑さでどうかしてたわ」

魅音「xdrちゅbにおmぼみ@おつんびいうytdc」

魅音以外「……………」

さらに20分後

魅音以外「……………」

魅音「¥。@-¥^。。¥@….\$&\$ '\$ '\$!.\$」

さらにさらに20分後

魅音「・・・」

魅音は気を失った。

魅音に関しては…お察しください。

t o b e c o n t i n u e d

数分後。

魅音「あ、あれ…私は…。っていつかみんなは!？」

竜騎士07「大丈夫かい、魅音ちゃん」

魅音「あ、はい、大丈夫です。それよりあなたは…」

竜騎士07「自己紹介が遅れたね。僕は竜騎士07」

魅音「やっぱり!」

竜騎士07「君の近くでモンスターが術を掛けていたからね」

魅音「助けてくれてありがとうございます」

竜騎士07「でもどうして一人で？」

魅音「それは…」

少女説明中

竜騎士07「そう。じゃあはぐれた仲間を探さないかね」

魅音「一緒に探してくれるんですか!？」

竜騎士07「もちろんさ!」

魅音「えっ？ その話し方…」

竜騎士07「な、何でもないよ」

魅音「そう…ですか…」

一方こちら霊夢班。

蒼星石「本当に置いて来て良かったのかな？」

霊夢「じゃああんた、あれをどうにか出来た？」

蒼星石「それは…」

霊夢「ね？」

翠星石「あちーですう…」

戻って魅音たち。

魅音「は…・…へ…・…ハクツシュン！」

竜騎士07「大丈夫ですか？」

魅音「きつとはぐれた仲間が私の事を心配してるんだと思います」

竜騎士07「(ずっと訳分らないこと言っていて、置いていかれ、

陰口を言われてるのでは？」

魅音「どうしたんですか？」

竜騎士07「何でもないよ。ちょっとハンバー・・・いえ、ちょっと・・・」

魅音「はんばー？」

竜騎士07「さ、さあ、仲間を探しましょう！！」

魅音「・・・おー！」

下
下

t o b e c o n t i n u e d

「こちらは霊夢班。

霊夢「暑いわねー」

蒼星石「ねえ、魅音は…」

真紅「暑いわね」

蒼星石「…」

歩くこと15分。

霊夢「……………」

真紅「……………」

蒼星石「……………」

さらに歩くこと10分。

霊夢「……。あつ！ あれってオアシス!？」

蒼星石「そうみたいだね」

梨花「屋気楼かもしれないのです」

真紅「その可能性もあるわね」

霊夢「とりあえず行ってみましょ！」

そして歩いていくと、屋気楼ではなくそれは実在した。

霊夢「やったわ！　ここで休憩よー！」

思い思いに休憩する霊夢たち。水浴びをする者、水辺や草の日陰で寝る者。

そしてそれを見る者…ん？

真紅「そこにいるのは誰なの。隠れてないで出てきなさい」

竜騎士07「やあ、僕だ…えっと、私は竜騎士07といます」

魅音「竜騎士さん速いよー…。あ、みんな！」

真紅「心配したのよ」（棒読み）

霊夢「ホントよ。まったく、心配かけさせて」（棒読み）

蒼星石「（あの竜騎士って人の話し方ってもしかして…）」

蒼星石「ねえ、真紅。あの人ってもしかして…」

真紅「ええ、なんとなくわかってるわ」

霊夢「たぶんそうよ」

他「?」?
「?」?

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

↳ don't mix danger ↳ 27 (後書き)

はたしてそうかな？

どうかな？

こちらは密林。

のび太「ド、ドラえもん！ 助けてよう」

ドラえもん「もっとやれー！ー」

ジャイアン「逃げるなのび太！！」

魔理沙「……………」

圭「……………」

雛莓「がんばれなのー」

5分後

のび太「も、もうダメ……………」

ジャイアン「チツ だらしないな！」

魔理沙・圭「……………」

雛莓「ジャイアンの勝ちなのー！」

ジャイアン「応援ありがとうー！！」

さらに5分後

ジャイアン「なんだ、お前ら道に迷っていたのか。それなら俺とドラえもんで案内するぜ」

圭「いいのか!? ありがたいぜ」

ドラえもん「任せな」

ジャイアン「じゃあ、さっさと行くか」

ドラえもん「コレは置いていかないとな」

雛苺「メガネは置いていけばいいなのー」

魔理沙「…雛苺のキャラが変わってないか？」

圭「ああ…」

雛苺「いくなのー!」

こうして家を出発した魔理沙班。雛苺が黒化したか？

t o b e c o n t i n u e d

ちなみに、その後ののび太。

のび太「うーん…。あ、あれ…みんなは？」

のび太「おーい、どこに行ったんだよう…」

のび太「ドラえもんくん！！」

？」「うるさい」

ダンッ！！（銃声。お察し下さい）

？」「やっと静かになったわ」

don't mix danger 28 (後書き)

何者なんでしょうね。今はまだ秘密です。

真紅「ねえ、あなた」

竜騎士07「なんだい？」

真紅「あなた、もしかして・・・」

ドドドドドドドドドド...

霊夢「誰!?!」

ドドドドドドドドドド...

蒼星石「誰!?!」

トミー「僕だよ!」

霊夢「トミー!!!」

トミー「お師匠さん、お久しぶりです!」

竜騎士07「久しぶりだね」

一行「師匠!!!?」

竜騎士07「そうだよ。トミーを育て上げたのは僕だよ」

蒼星石「その話し方は?」

トミー「この話し方もお師匠さんから教えてもらったんだ！」

竜騎士07「ちょっとやりすぎちゃったけどね」

霊夢「チートは？」

竜騎士07「それも僕だよ。葛西と一緒にね」

蒼星石「あの強いオークは…」

竜騎士07「ああ、それも僕だよ。僕の持つ知識と、葛西の知識を詰め込んだ最高傑作だよ」

真紅「じゃあ葛西が言った『ある方』っていうのは、あなただったのね」

竜騎士07「それを聞いて、よく生きていられたね。そんな奴だったかな？」

霊夢「確かにそうよね…」

竜騎士07「まあ、遊んだつもりなんだろうね」

蒼星石「あれで遊び…」

トミー「お師匠様！ またお供させてください！」

竜騎士07「いいですよ。では行きましょつか」

「トミー」はい！ それじゃあね、みんな。僕はみんなのトミーだからね……！」

「行」……！」

t o b e c o n t i n u e d

don't mix danger 29 (後書き)

遅いかもしれませんが、竜騎士07様、ZUN様、勝手に出演させてしまいすみませんでした。

『ラスボス』早く出したい…。けっこう好きなキャラ…。いや、かなり好きなキャラなので。

出てくるのはかなり最後です。

don't mix danger 30 (前書き)

作者のぼやき回です。

ストーリー重視の方は読む必要は無いです。蛇足が好きな方はどうぞ。

どうでもいい裏話付き！

作者「はい、やって来ました。作者のぼやきタイム」

霊夢「もう何も言わないわ」

作者「この話はストーリーの補足みたいなものなので、ちゃんと全員そろっています」

霊夢「いま私達がいる場所を詳しく」

作者「私が想像して書いたのは、昔、ドラえもんの映画で『のび太のドラビアンナイト』の砂漠のシーンです。分かる方には分かるかと。読者自身で自由に想像してもらって構わないです」

魔理沙「じゃあ、こっちがいる場所はどっなんだ？」

作者「密林っていう事以外、ほとんど考えてません（笑）」

真紅「キャラの崩壊が多くなってきた気がするのだけど？」

作者「書きやすいからですな。それと、普段の雰囲気とのギャップが好きだからです。好きなものは、どんどん取り入れる主義です」

真紅「それだけの理由で、私まで壊されたわけね。覚悟は出来てるわよね？」

作者「すみません、出来てないです。そして、真紅、魅音、ドラえ

もん好きの皆様、すいませんでした。これからは、もっと酷く壊していきたいです（笑）」

魅音「この後、どうやってまちゃん達と合流するの?」

作者「はっきり言います。まっつったく考えていません!」

翠星石「どーするですか!」

作者「わかりません。代わりに、と言っでは何ですが裏話でもどうでしょうか?」

レナ「裏話?」

作者「はい。沙漠でお2人が狂って、2班に別れましたよね。実はアレ、予定してなかったんです」

水銀燈「それで?」

作者「ボツになった話は、2班に分かれず沙漠の場面になります。そしてオアシスで野原しんのすけ（クレヨンしんちゃん）が出てくる予定でした」

沙都子「どうしてボツになりましたの?」

作者「その後の展開が思い浮かばなかったんです。友人Mに助けを求めても『無理。知らない』と冷酷でした。現実是非情である」

全員「へえ〜」

蒼星石「それで？」

作者「それだけです。この小説のネタ出しに関して『こんな裏話があるんですよ』というだけです」

作者「さて、そろそろばやきタイムも終わりです。次は『don't mix danger』40』でお会いしましょう。そこまで続けば、ですが。それでは、さよ～なら」

t o b e c o n t i n u e d

don't mix danger 31 (前書き)

don't mix danger 29 からの続きとなっ
ております。

砂漠班。

霊夢「行っちゃったわね」

蒼星石「うん」

レナ「これからどうなるのかな。かな？」

真紅「どうなるのかしらね」

全員「・・・」

魅音「と、とりあえずまた歩いてみようよ」

霊夢「そうね」

そして歩き始めて10分

翠星石「あちーですう・・・」

金糸雀「暑いのかしらー・・・」

さらに歩くこと20分

翠星石「つかれたです。。。もう歩けねーですう・・・」

真紅「あそこに何かあるわよ」

真紅が指差した方向にあったのは、何かしらのドームみたいなもの。

霊夢「町…かしらね？」

翠星石「休憩するです!!」

近づいてみると、それは外から守るために建てられた高い壁で囲まれていた。

さらにその壁から、薄緑色のシールドが張られている。完全に中と外が隔離させられている。

そして、その建物の入り口であると思われるところに、文字が刻まれていた。

魅音「セプテット」

霊夢「この建物の名前か、村か町の名前ね」

真紅「七重奏」

霊夢「えっ？」

真紅「Septet 七重奏よ」

はたして、この建物は一体…。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

don't mix danger 31 (後書き)

ちなみに、

Solo: (ソロ) 独奏

Duo: (デュオ) 二重奏

Trio: (トリオ) 三重奏

Quartet: (カルテット) 四重奏

Quintet: (クインテット) 五重奏

Sextet: (セクステット) 六重奏

Septet: (セプテット) 七重奏

Octet: (オクテット) 八重奏

と、なっています。九重奏以上は、あまり表記しないため微妙なところですが。ないこともないみたいですが。

don't mix danger 32 (前書き)

手榴弾一号先生の「炭疽菌」という言葉。
ちよっと使ってみたかった作者です。

砂漠で謎の建物を見つけた、霊夢たち一行。

真紅「何かし…」

その時、ウィーン…という音を立てて、扉が開いた。

蒼星石「こ、これは…」

そこには村があった。しかし、何か様子がおかしい。

霊夢「人が…いない…」

そう。誰一人として外にいないのだ。

少なくとも、霊夢たちが見られる範囲には誰もいなかった。

翠星石「炭疽菌にでもやられたじゃねーですか？」

蒼星石「それはいくらなんでも…」

魅音「家の明かりもついてない…」

レナ「ねえ、ここ…見たことない…?」

蒼星石「そう言えば…。っ！ こじは！」

真紅「気付いたようね。そうよ、ここは確かにオーエンだわ」

霊夢「オーエンって、あの消えて無くなってた村!？」

真紅「そうよ」

魅音「でも入り口に『セプテット』って書いてあったじゃん」

真紅「そう言うなら、あれを見てみなさい」

真紅が指差した所にあつたのは、村を襲ってきたオーク達と戦ったときに出来たであろう、マスタースパークの跡がくっきりと残っていた。

レナ「じゃあ本当にここは…」

真紅「間違いなくオーエンよ」

翠星石「一体全体どーなってるですか!」

霊夢「葛西の仕業ね」

真紅「可能性は無くは無いわね」

魅音「入り口で考えても仕方ないし、歩いて見て回ろうよ」

レナ「そうだね」

村を歩き回る一行。一度見た村だからか、すんなりと回ってこれた。

しかし、人はいない。道具屋、宿屋、民家。ほぼ全てに入ったが、やはり人はいなかった。

ただ一つだけ、おかしい建物を見つけた。

霊夢「…こんなのがあったかしら？」

目の前にあるのは見覚えの無い建物。

真紅「十字架があるところを見ると、教会ね」

消えたはずの村。見覚えの無い教会。一体ここは…。

t o b e c o n t i n u e d

時を少し戻して密林班。

ジャイアン達の案内で、密林を歩いて5分。

圭「なあ、のび太は置いてきてよかったのか？」

ドラえもん「いいんだよ。それに今頃、しん：何でもない」

ジャイアン「そこ気をつけろよ。モンスターの罠があるぞ」

魔理沙「おおっと。危なかったぜ」

雛苺「ギリギリセーフなのー」

さらに20分後

魔理沙「まだこの密林から抜けられないのか？」

ジャイアン「これで半分つてところだな」

雛苺「つかれたなのー」

ジャイアン「じゃあここらで休憩とするか」

圭「モンスターが襲ってきたりしないのか？」

ジャイアン「大丈夫だ。ここら一帯には、モンスターが嫌う臭いを

放つ草や茸が生えてるからな」

魔理沙「だからさつきから出てこないのか」

ドラえもん「こんなモンしかないけど、まあ食べ」

ドラえもんが出したのは、ドラ焼きと水筒。

圭「いいのか？ ありがとうな」

魔理沙「その中身はなんだ？」

ドラえもん「紅茶だよ」

魔理沙も圭も雛苺も、何の疑いも持たず、出された紅茶を飲み
ドラ焼きを食べ、休憩した。

5分後

ドラえもん「くっくくくくく……」

圭「どうした？ ……ッ！！」

魔理沙「か、体が……うごか……ない……」

雛苺「……」「スピー……（寝ているのよ？ どこをどう聞いても寝て
いる効果音でしょ？）」

圭「な、なに……を……」

ドラえもん「少し毒をね。ゆっくりおやすみ。くくく……」

魔理沙「こ……の……」バタツ……

圭「ねて……またる……か……」バタツ……

ドラえもん達の狙いは何なのか!?

t o b e c o n t i n u e d

don't mix danger 33 (後書き)

今日はひな祭りですね。偶然にも雛苺が出てますね。
いやあ〜めでたいめでたい。

霊夢「…さ…し…!」

魔理沙「(…騒がしいな…)」

魅音「け…う…の…!」

圭一「(う…ん…。なんだ…?)」

真紅「…な…!」

雛莓「(うゆ…?)」

霊夢「魔理沙あー!」

魅音「圭ちゃーん!」

真紅「雛莓!」

魔理沙「(霊夢…?)」

圭一「(魅音…?)」

雛莓「(しんく…?)」

レナ「目を覚まして、みんな!」

魔理沙「(目を覚ませって…どっいつことだ?)」

圭「何をそんなに騒いでるんだ？」

翠星石「何でおめーらは攻撃してくるんですか！」

魔理沙「（攻撃…？ えっ！？）」

魔理沙たちは、霊夢たちを攻撃し続けていた。

それも、普段の威力より数段強く。

魔理沙「（一帯どういう…。あの毒か！ くそ！ 体が勝手に動
ぜ。声も出せない！）」

ドラえもん「どうだ？ 味方と戦う気分はよお！」

蒼星石「どうしてこんな事を！ …聞くだけ無駄か」

ジャイアン「そうだ。どうして俺達がマスクをしているか聞きたい
か？」

蒼星石「そういえば！」

ジャイアン「それはだな…」

ドラえもん「バカ！ それを言うのはまだ早い！ もっとも、勘が
鋭い奴は気付いてるかも知れねえがな」

霊夢「魔理沙！ もう止めて！」

魔理沙「（止められたらとっくに止めてるんだよ、くそっ！…！）」

蒼星石「くっ…ぐっ…」バタツ…

翠星石「蒼星せ…」バタツ…

魅音「みんな！ どう…」バタツ…

t o b e c o n t i n u e d

真紅「もしかして何かの細菌…」バタツ…

その他「くっ…」バタツ…

ドラえもん「ハハハハハハハハハハハハ！ その細菌はなあ、体内に入ると脳を侵していくんだぜ。まあ、誰も聞いちゃいねーだろーがなあー！」

ジャイアン・ドラえもん「アツハツハハハハハハ！」

？「そこまでよ」

ドラえもん「！！ その声は…」ダンツ！（じゅ、銃声なんだからねっ！）

ドラえもん「ぐっ！ 貴様、裏切る気が！」

？「仲間になつた覚えはないわ」

ダンツ！（だ、だから銃声なんだつてば！）

ドラえもん「くっ…」バタツ…

ジャイアン「うわあああー！！」ダンツ、ダンツ！（銃声だもん…。銃声…だもん…）

ジャイアン「う、裏切り…もの…」バタツ…

？「仲間になった覚えはないと言っているわ。さて、この細菌にやられた奴はどうしようかしら」

霊夢「うん……。ここは…」

？「おっ、目を覚ましたのね。悪いけども少し寝ててもらおうわ」

ガンッ

霊夢「あん……たは……」ガクッ……

？「ふ…」……」

圭一「…」……は……」

魅音「圭ちゃん！目が覚めたんだね！！！」

圭一「魅音！！！」

霊夢「やっと合流できたわね。（さっきのは一体…）」

魔理沙「だな」

わいわいがやがや…

真紅「さて、そろそろ行きましょうか」

無事…ではないが、魔理沙たちと合流できた一行。しかし、これからどこに向かうというのだろうか。

t o b e c o n t i n u e d

魔理沙「ところでここは？」

真紅「砂漠よ」

圭一「じゃあどこに行くんだよ」

蒼星石「さあ？」

魔理沙・圭一「……」

霊夢「とりあえずこっちな」

翠星石「なんでわかるですか？」

霊夢「勘よ」

魅音「勘って……」

魔理沙「大丈夫だぜ。霊夢の勘は当たる。私が保証する」

霊夢「そゆこと。さ、行きましょ」

真紅「……そうね……」

歩き出した一行。

しばらく歩くと、その勘は当たっていたようで、洞窟らしき場所

に辿り着いた。

霊夢「ね？」

蒼星石「『ね？』って言われても…」

沙都子「これ、本当に大丈夫でして？」

梨花「何かあったらボクが守ってあげるですよ」

真紅「行くわよ」

洞窟の中へと入っていく一行。中は火が灯っていているわけでもないのに、暗くはなかった。

蒼星石「この光っているのは一体…」

？「それは雷光虫。背中が光るんだ」

真紅「あなたは？」

誠「僕は伊藤誠。この洞窟に住んでるんだ」

霊夢「じゃあこの洞窟に詳しいのね」

誠「一応はね」

翠星石「じゃあとつと案内するです！」

誠「う、うん」

誠の登場。こいつでいいのか…？ 歩く死亡フラグ野郎…。

t o b e c o n t i n u e d

洞窟内で出会った誠に案内してもらっている一行。

翠星石「真紅うゝ。コイツ何だか変なオーラが出てるですう」

真紅「そんなの会った時から気付いてるわ」

蒼星石「やっぱり真紅も？」

真紅「ええ、勿論よ。一刻も早くコイツと離れたいわ」

魔理沙「何ボソボソ話してるんだ？」

翠星石「何でもねーです」

真紅「（鈍感ね）」（視線を蒼星石へ）

蒼星石「（全くだね）」（視線を真紅へ）

魔理沙「？」

梨花「知らぬが仏なのですよ」

魔理沙「??？」

真紅「霊夢を見てみなさい」

魔理沙「えっ？」

霊夢「……」「コトコトコト…」

魔理沙「何なんだ、あの禍々しい気は」

真紅「殺気ね」

誠「どうしたの？ 大きな声出して」

魔理沙「な、何でもないぜ」

誠「そう？」

蒼星石「気付いてないみたいだね」

真紅「鈍感ね」

翠星石「あっちもすごい気ですう」

レナ「……」

真紅「静かな殺気ね」

魔理沙「何でこんなに気が立ってるんだ？」

真紅・翠星石・蒼星石「（鈍感）」

魔理沙「何だよその顔……」

蒼星石「まあ、あんまり気にしないで」

魔理沙「????」

皆さん勘が良いようです。

t o b e c o n t i n u e d

誠「いったん、僕の家にもいいかな。地図を取りに行きたいんだけど…」

霊夢「…ええ、いいわよ」

誠「ありがとう」

そして洞窟の中の誠の家（部屋？）に着いた。

真紅「…何も無い部屋ね」

誠「地図を探してくるから、そのソファやベッドに座って待っててよ」

誠はみなが座るのを見てから、地図を取りに……行かずに戻ってきた。

霊夢「な、何するのよ!」

誠「……」

誠は地図を取りに行かずに、ベッドに座った霊夢を押し倒し、上に跨った。

真紅「やっぱりそうだったのね!」

真紅、蒼星石、翠星石の攻撃。誠は314ダメージ。誠は怯まな

い。

蒼星石「ひ、怯まない!？」

霊夢「このっ! 離れなさいよ!」

霊夢の攻撃。誠は140ダメージ。誠は怯まない。

誠は霊夢から降りて、圭一の方へと近づいていった。

圭一「この野郎!」

圭一の攻撃。脳天を直撃。グシャ という音と共に血が噴き出す。

しかし誠は怯まない。

誠の攻撃。圭一はひらりとかわした。

圭一「何だあいつ。頭から血が出るのに、何ともない顔してるぞ」

真紅「気持ち悪いわね」

梨花「気持ち悪いから、早く殺してしましましょうなのです」

圭一「1500秒で十分だぜ」

霊夢「……クロス」

魔理沙「怖いぜ霊夢」

誠「・・・」

さあ、みんなで誠を殺そう！（笑）

t o b e c o n t i n u e d

don't mix danger 39 (前書き)

久しぶりのグロ。流血表現あります。

グシャ…グシャ…ベシャ…。

魔理沙「ファイアーボール！」

ゴオオオオオ…

誠「…」

辺りに人が燃える臭いが立ち込める。

梨花「臭い足は切り落としてしまいましたしょうなのです」

霊夢「足の指からね」

殺気を放ちながらも笑顔でそう言う。

スパンツ（足の指切断音）

誠「…。。ギヤアアアアアー！！」

真紅「何なの、いきなり人が変わったように」

魅音「もしかして二重人格とか？」

誠「うう…足がああああ」

蒼星石「そうなのかもね」

霊夢「今更そんなこと信じると思ってるの?」

スパツ！（左足の膝あたりの切断音）

誠「ぎゃああああああああああ!」

霊夢「見て。血が噴水みたいに出てるわよ」

スパツ（右足の指切断音）

誠「ギヤアアア…アアア…。。…」

霊夢「あら？ 気絶しちゃったのかしら？ 真紅」

真紅「めんどくさいわね…。リザレクション!」

誠は復活した。

霊夢「まだ気絶しちゃダメよ」

スパンツ！（右手の指の切断音）

魔理沙「な、なあ…」

霊夢「アハハハハハ。もっと血を噴いて、もっと私を赤く染めて。アハハハハハハハ!」

魔理沙「れ、霊夢…?」

霊夢「どつしたの？ もう血、出ないの？ じゃあ次は中だね」

そう言って、腹を切り裂く。

霊夢「いいよ、いいよ、その内臓。まずは胃からいっところつか」

グロい…かな？

t o b e c o n t i n u e d

↳ don't mix danger ↳ 40 (前書き)

もう何も言わずとも…そうなるのである。

はい、作者の自重、自嘲タイム。

作者「来ました来ました、来ましたよー!」

真紅「騒がしいわね」

作者「いや、まさかこんな小説が40までいくとは。10〜20
ほどで終わると思っていたものですから」

蒼星石「あとどれくらい?」

霊夢「せいぜい50くらいでしょうね」

作者「そ、そう言われると…。いやいや、まだやりますよ。がんば
りますよ」

魔理沙「作品はどれくらい加わったんだ?」

作者「もう憶えてないです(笑) 憶えてないのに、さらに加筆修
正したので、余計に憶えてないです」

翠星石「バカですう」

作者「覚えてる限りで言うと、School Days、ドラえも
ん、テイルズ、ドラゴンライジャ、ゼロの使い魔。例のごとく、知
らずに使っているのもあるかもしれませんが」

圭「ドラゴンライジャ? 聞いたこと無いな」

作者「ドラゴンライジャは知らないと思いますので、スルー推奨です。使った部分は細菌のところですか。気になる方は、ググってください」

魅音「消えた村のやつは？ どうなってるの？」

作者「あれはただ単に『世にも奇妙な物語』風味にしたかっただけです。なので、細かい設定は考えていません」

レナ「伏線でもないのかな？」

作者「伏線でもありません。ちなみに、村の名前のセプテットは東方紅魔郷『亡き王女の為のセプテット』より持って来ました。知っている人は分かったと思います」

霊夢「私たちを助けてくれたスナイパー。あれはもしかして、も…」

作者「わー！ わー！！ それは禁則事項です！ その名前は言っちゃダメです！」

霊夢「何がいけないのよ。裏があるんじゃないの？」

作者「ア、アリマセンヨ？ 裏があるっていうかネタがありません」

霊夢「ふーん」ジトー

作者「……」（冷や汗）

魔理沙「いいじゃないか霊夢。許してやれよ」

霊夢「…わかったわ」

作者「ホッ…」

真紅「何で誠は霊夢を選んだのかしらね」

霊夢「そういえばそうね」「ジトー」

作者「それは…」

霊夢「それは？」

次回（50）で明らかに！？

作者「魔理沙たちが操られていた話が分かりにくかったと思います
が、私の文章力がなくて、あれが限界でした。すみません」

t o b e c o n t i n u e d

ブチッ…ブチッ…

霊夢「アハハハハハ。胃、とれちゃったわね」

真紅「…」

圭一「な、なあ。もう死んでるんじゃない…」

霊夢「どうしたの？ 腹を切り裂かれないの？」

圭一「ひいひいひい…」

霊夢「胃はトレチャッタからツギ八腸にシトク？」

霊夢の紅白の服が、さらに紅く染まる。

魅音「何とかならないの…魔理沙」

魔理沙「…」

霊夢「アハハハハハハハ！」

霊夢の狂気の笑い声が響き渡る。

霊夢「さあ、次は誰が相手かしら」

圭一「お、おい…なんでこっちを見てるんだよ」

魔理沙「止める霊夢!!」

霊夢「アハハハハハハハハハハハハハハハ!!」

霊夢は凄まじい速さで圭一に近づき、腹を切り裂いた。

圭一「ぐっ…がはっ…」

霊夢「アハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ!!」

魔理沙「いくら霊夢でも、仲間を殺すような奴は許さないぜ!!」

魔理沙の攻撃。霊夢はひらりとかわした。

霊夢「そんな攻撃、私には当たらないわよ。アハハハハハハハハハ!!」

霊夢「みんな、みんな死んじゃった。アッハハハハハハ!!」

t o b e c o n t i n u e d

霊夢「アハハハハハハハハハハハハハハハ」

魔理沙「れ…れい…む…。や…めろ…」

霊夢「アハッ。まだ生きてたの？　じゃあ魔理沙はどんな風に殺ら
れたい？」

魔理沙「も…との…れい…むに…もどってく…れ…」

霊夢「でも、マリサは後でね。先にお人形遊びしないと」

真紅「…」

魔理沙「やめろ…よ…」

霊夢「マリサがそう言うのなら、先にやってあげるね。どっさらたい
？　ねえ、どうされたい？」

魔理沙「ば…か…言っ…てん…なよ…」

霊夢「生きたまま頭を切り開く、なんて面白いと思わない？」

そう言って魔理沙に近づくと…。

スパッ

鋭く、軽い音が響いた。紅く赤い血が水溜りをつくる。

don't mix danger 42 (後書き)

打ってる内に恥ずかしくなってきた。

なんだかもう黒歴史化…。

霊夢「アハハハハハハハハハハハハハハ」

?「…いむ…。れ…む…」

霊夢「!? 誰だ!」

?「れい…む…」

霊夢「うん…。ここは…?」

魔理沙「大丈夫か、霊夢。ずいぶんとうなされてたぜ?」

霊夢「(あれは夢だったの…?)(」

圭一「大丈夫なのか?」

霊夢「あ、うん、大丈夫よ…。いつから寝てた?」

真紅「ベッドに座ってから、倒れるように寝たわね。それだけ疲れ

ていたのよ」

誠「もう大丈夫？ 地図もあったし、出発しようか」

霊夢「ええ、行きましょ」

霊夢「（来るまでに感じてた、あの嫌なオーラは…）」

真紅「（わからないわ。隠しているのか、それとも別の何かだったのか）」

蒼星石「（ところでさ、何でうなされてたの？）」

霊夢「うっ…た、単なる夢よ」

誠「どうかした？」

霊夢「な、何でもないですー」

誠「？ そっ？」

真紅「（霊か何かの夢かしらね）」

蒼星石「（霊夢だけになってことね…）」

レナ「（でもあそこには、変な気配が混ざっていたんだよ）」

霊夢・真紅「（ッ！ー）」

真紅「び、びっくりしたのだわ…」

霊夢「心臓に悪いわよ…」

誠「どうしたの、さっきから」

梨花「乙女達の会話に、男の空気はいららないのですよー」

誠「??？」

霊夢「(それで変な気配って?)」

レナ「(う、うん…あんまりうまく説明できないんだけど…)」

一体、レナが言う変な気配とは？

t o b e c o n t i n u e d

レナが言う気配とは…。

レナ「(うん…なんだか圧力みたいな…威圧感みたいな…)」

霊夢「(威圧感ね…ザコ敵ではなさそうね)」

蒼星石「(でも、そこまでの感じはしなかったけど…)」

真紅「(あら、意外と鈍いのね)」

蒼星石「(い、いや別に…。そこまで鋭いと思われてたの?)」

真紅「(少なくともアイツよりは、ね)」

水銀燈「な、何よ」

霊夢「(はいはい。そんなことはいいから。さっきまでの気配の」と何だけど、もしかしてボ…)」

誠「そろそろ出口だよ」

圭「おっ出口か。やっと太陽の光が浴びれるぜ」

魔理沙「こんなジメジメしたところは、魔法の森だけで十分だ。地下も行ったことあるしな」

誠「慣れると、けっこういいところだよ」

翠星石「だからおめーはそんなジメジメ野郎なんですー!」

誠「ジメジメしてるかな…?」

翠星石「ジツメジメのベットベットです!」

霊夢「まったく…騒がしいわね…」

誠「このまま真っ直ぐ進むと川があるから、川上に行けば村があるよ」

雛莓「ありがとうなのー」

魔理沙「そろそろ武器を買い換えたいぜ」

圭「俺なんて、ずっとこの金属バットだぞ」

真紅「いいわね、愛し合っていて」

圭「ちげえええええ!」

魅音「圭ちゃん、そんなにチゲ鍋が食べたいの?」

圭「ちがーう!」

霊夢「…終わった? なら行くわよ」

魔理沙「どうした霊夢。いつにも増してパサパサしてるな」

霊夢「……ひんねい」

魔理沙「へいへい、わかりましたよ。霊夢様」

霊夢「……」

t o b e c o n t i n u e d

洞窟を抜け、村を目指す一行。

霊夢「ねえ、本当に大丈夫かしら？」

蒼星石「どうしたのいきなり」

真紅「何がそんなに心配なの？」

霊夢「忘れたの？ 今までこの手の方法で、何回騙されたことか」

霊夢以外「あつ」

圭「すっかり忘れてたぜ…」

魔理沙「そうだけど、行ってみないことにはわからないぜ」

翠星石「嘘だったら、あいつをボコボコにしてやるですう！」

霊夢「本当に殺してやるわ…」

水銀燈「本当に？ まるで1回殺したことがあるような言い方ねえ」

霊夢「何でもないわよ」

そして言われた通り進んでいくと…。

『ようこそ、ダークサイドへ』という看板を見つけた。

霊夢「…どっくにや」

真紅「どこにあるのかしらね」

圭一「見当たらないな」

看板はあるものの、それらしき建物は全くなかった。

翠星石「血祭りですう！！」

ここまで来るのにかかった時間の、約半分の時間で洞窟まで戻ってきた一行。

誠「あれ？ どうしたの」

翠星石「さあ、心の準備はできていますか！」

霊夢「……………」

誠「なっ、えっ、ちょっと2人とも殺気が……………」

翠星石「覚悟しやがれです！」

誠「う、うわあああああ！…！」

誠死亡（笑）

t o b e c o n t i n u e d

誠を殺した2人。行き先がなくなった一行。

真紅「どうするのかしら？」

霊夢・翠星石「…」

蒼星石「あの人、何か言いたそうじゃなかった？」

魅音「そう？」

霊夢「あの事については知らないみたいな感じだったわね」

圭一「あの話し方は、知らないような話し方だな」

翠星石「無実の人を殺めちまったです」

霊夢「まあ『死んじゃった』ものは仕方ないし、墓でも作ってあげ
ましようか」

魔理沙「私たちもやるのか!？」

霊夢「手伝わないつもり？」

魔理沙「笑顔が怖いぜ、霊夢」

霊夢「わかったならいいわ」

そして誠の土の墓が出来上がった。

霊夢「ようやく終わったわね」

翠星石「疲れたですう……」

真紅「あんた達のせいでしょ」

その時。

魅音「きゃあああああ!!」

真紅「!!」

魅音は土の中へと引きずり込まれてしまった。

ポカーンとする一行。

霊夢「えっと……あの……」

真紅「引きずり込まれていったわね」

蒼星石「……」

圭「……どうするっ？」

魔理沙「そりゃあ、助けるしか」

霊夢「……どうやってっ？」

翠星石「土でも掘るですか？」

蒼星石「…」

t o b e c o n t i n u e d

土の中の洞窟。

魅音「ん…ここは…」

? 「みおん…魅音…」

魅音「誠…あなた!」

誠「ミオン…みおん…」

誠が襲い掛かってきた。

魅音「ふっふっふっ…あーはっはっはっは」

誠「何がオカシイ」

魅音「みんなに黙ってたけど、あたし魅音じゃないですし」

詩音「私、詩音ですから」

誠「ダレだそれは」

詩音「あなたに言ってもわからないですよねー」

一方、地上では。

真紅「どうしようかしら？」

蒼星石「どうしようもないけどね…」

霊夢「あっちでは土掘ってるけどね」

圭一「今行くぞ、魅音！」

魔理沙「待ってるだけ！」

雛莓「みんなで助けるなのー！」

金糸雀「もっと速く掘るのかしらー！」

真紅「…バカね…」

霊夢「どこまで掘るのかもわからないのね」

…ト…

蒼星石「この音って…」

…ト…

霊夢「まさか…」

トニーン「僕だよー！」

竜騎士07「僕もいるよ」

真紅「トミーに竜騎士…」

トミー「そっだよ。僕はみんなのトミーだよ！」

t o b e c o n t i n u e d

翠星石「詩いちゃんって誰ですか？」

圭一「詩音は魅音とそっくりの双子だ」

魅音「そ、それよりなんで地上（じょうじょう）に？ 確か地下（じか）に連れて行かれて…」

トミー「僕だよ！ 僕が助けてあげたんだ！ だって僕はみんなのトミーだからね！」

ズモモモモモモ…

魔理沙「今度は何だ！？」

誠「オマエラ ナニヲシタ！」

竜騎士07「こいつが敵なのかい？」

誠「オマエカ！ クラエ！」

誠の攻撃。

誠「デッドボム！」

魅音「竜騎士さん！ トミー！」

竜騎士07「大丈夫さ」

トミー「何ともないよ！ だって僕はみんなのトミーだからね！」

誠「ム、ムキズ…ダト…」

竜騎士07「ATフィールドさ」

トミー「全ての攻撃を防げるのさ！ ハハッ」

誠「グッ…ナラバ コツチヲ ネラウマデサ」

霊夢の攻撃。誠は266ダメージ。

翠星石の攻撃。誠は193ダメージ。

魅音の攻撃。誠は210ダメージ。

t o b e c o n t i n u e d

魔理沙の攻撃。誠は310ダメージ。

圭一の攻撃。誠は169ダメージ。

レナの攻撃。誠は341ダメージ。

水銀燈の攻撃。誠は260ダメージ。

蒼星石の攻撃。誠は216ダメージ。

梨花・沙都子・雛莓・金糸雀の協力攻撃。誠は933ダメージ。

竜騎士07とトミーの合体攻撃。誠に13763ダメージ。

誠「コンナ…コンナ コウゲキデ オレハ タオレナイ」

霊夢「当たり前よ。手加減してるんだから」

誠「ナニ!?!」

トミー「本気を出してもいいのかい?」

竜騎士07「もちろんさ!」

トミーの攻撃。誠は8713ダメージ。

トミー「ハハッ! まだ耐えられるかな」

トミーの追加攻撃。誠は9112ダメージ。

誠「ツヨク…ナツテ…」

トミー「喋ってる暇があるのかい？」

トミーの追加攻撃。誠に9609ダメージ。

ピタッ…。時は止まる。

トミー「ハハッ！ ザ・ワールドさ」

トミーの攻撃。誠の目の前で、たくさんのナイフが止まる。

そしてついに、誠の周りがナイフに覆われ、誠の姿は見なくなっていた。

トミー「そして時は動き出す」

誠「うわっ…」

ザクザクザクザクザクザク…

誠は135,011ダメージ。誠はナイフだらけになり逝った。

トミー「楽勝さー！」

竜騎士07「良く出来ました」

真紅「」

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

作者「もう終わります!」

霊夢「何よ…いきなり」

作者「もう終わりますね。あとはラスボスの城だけです」

翠星石「ラスボスの城ですか?」

作者「ええ…その予定です…」

魅音「60まで?」

作者「たぶん…そうなるかと…。それでは、さよーなら…」

翠星石「やい! まだ帰るには早いです! もっと疑問に答えていきやがれです!」

作者「…何かあるんですか…?」

真紅「そうね。じゃあ、誠がいきなりナイフだらけになったのは、どうしてなの?」

作者「そうですね…あなた方には…」

翠星石「もっとシャッキリしろです!」

作者「すみません…」

翠星石「ぜんぜん変わってねえです！」

蒼星石「もうやめてあげなよ、翠星石」

作者「蒼は良い子だなあ…。あとでたくさん登場させてあげるよ」

魔理沙「で、どうしてナイフだらけに？」

作者「ああ、えっと…あれはトミーの時止めですね」

水銀燈「チートばかりじゃない」

レナ「竜騎士さんもチートのような感じがしたよね？」

圭一「ATフィールドとか言ってたっけ？」

作者「あれはチートじゃなく、能力です」

霊夢「ていうことは、まだチートを隠してるってこと？」

作者「そうかもしれませんがね…」

蒼星石「ところで、どうしてそんなにテンションが低いのか？」

作者「あ、いえ…眠たいだけです…」

霊夢「…」

蒼星石「…心配して損した…」

作者」…。それでは、さよーならー」

「シーズン2 なんて考えてないんだからね…バカ…！」 (CV・釘宮)

t o b e c o n t i n u e d

don't mix danger 51 (前書き)

更新するの忘れてました。すみません…。

☐ 内は看板の内容。

竜騎士07「さあ、ラスボスの城に行こうか」

霊夢「……」

竜騎士07「どうしたんだい？」

霊夢「…何でもないわ。行きましょ」

トミー「城はすぐそこさ！」

『ラスボスの城、あつち。徒歩5分』

蒼星石「（ええー……）」

そして歩くこと6分。

蒼星石「（ホントにあったよ……）」

真紅「…何か言うか…」

圭「ラスボスの城っぽくないな」

その城はキノコなどの飾りがあり、例えるならマリのイチ城
みたいだ。

というか、そっくりである。

魅音「こんなところにラスボスがあるの？」

トミー「間違いないよ。何度も来たからね！」

魔理沙「とりあえず入ってみようぜ」

ギィィィィ…という、扉を開けるときに使う便利な音を立て扉を開け、一行は中へと入っていった。

翠星石「暗いですう…」

霊夢「何か明かりを…」

？「いま点けますね」

その声と同時に、一瞬にして周りが明るくなった。

真紅「あなたは？」

竜騎士07「あの人がこの城の主。桂言葉 だよ」

言葉「……」

竜騎士07「がっ…は…」

言葉「私を呼ぶときは 様 を付けるように言ったでしょう？」

霊夢「ATフィールドを無効化した!？」

蒼星石「一体何を…何も見えなかった…」

トミー「ぐわっ…！ 大丈夫さ、僕はみんなの…」バタッ

真紅「トミー！」

蒼星石「死なないはずのチートまで…」

言葉様登場！

t o b e c o n t i n u e d

don't mix danger 51 (後書き)

更新忘れて、本当に申し訳ありませんでした。

don't mix danger 52(前書き)

ここから先、ずっとキャラ崩壊注意。

圭「何も見えない…。一体何をした！ 答えろ！」

言葉「何を？ いらぬものを捨てただけですよ？」

魔理沙「人とも見てないってことかよ」

雪華綺晶「おいおい、マジかよ！」

一行「喋った!!!?」

薔薇水晶「あなた達は…ここで…負ける…」

一行「こつちも!!！」

言葉「ご苦労様。2人とも」

霊夢「どういうこと!?!」

言葉「わからないんですか？ 2人は、あなた達の監視役ですよ。さあ、戻ってきなさい」

雪華綺晶「だからって、別に何もしてないんだけどな！ ま、あんたらはここで終わりだ。ごくろーさん」

薔薇水晶「…死んじゃえ…」

言葉「ちよっ、それ私のセリフ」

雪華綺晶「まあ、いいじゃねえか、それくらい」

一行「……」

言葉「2つ捨ててしまったから、誰か1人仲間にならない？」

雪華綺晶「姉さん、向こう凍ってますぜ。空氣的に」

一行「……」

薔薇水晶「……解凍……」

霊夢「あんたら、バカ？」

言葉「もう1度聞いわ。誰か1人、仲間にならない？」

魔理沙「絶対になるもんか！」

翠星石「私が……」

雪華綺晶「姉さん、操ってますね？」

言葉「もちろんですよ。私にとって人を操るなんて、造作もないことよ」

蒼星石「翠星石！ 何を言ってるんだ！」

翠星石「……」

don't mix danger 52 (後書き)

言葉様の簡単な説明。

・ヤンデレ女王

以上！ 大好きです！

ちなみに今日は、作者の誕生日です。

「いや、だから何？」って話ですよね。

言葉「……」

蒼星石「あああああー！」

キンッ！

蒼星石「なっ！」

蒼星石の攻撃は弾かれた。

言葉「ふふ…無駄ですよ」

真紅「どういうこと？」

言葉「私の能力は…」

圭「あいつの能力…」

言葉「それは『イメージを具現化すること』」

蒼星石「イメージを…」

魅音「具現化!？」

言葉「そうです。例えば…」

圭「ぐわあ！ あ…が…」バタッ

レナ「圭くん！」

言葉「今は『その男の子の内臓が潰れた』のをイメージしたんですよ」

雪華綺晶「何も殺^やる事だけじゃないんだぜ。壊れた物を直すイメージすれば、それが具現化されるんだぜ！」

薔薇水晶「つまりは…何でもできる…」

雪華綺晶「まったく、チートするきるよな！」

魔理沙「そんな奴に…どうやって勝てっというんだよ…」

言葉「勝つ？ 私に？ 無理に決まってるじゃないですか」

薔薇水晶「…そして誰もいなくなるのか…」

言葉「495年の波紋でそれを完全証明ね」

雪華綺晶「お前ら、わかる人にしかわからないネタは止める」

魅音「よくも圭ちゃんを！」

雪華綺晶「それ言うの遅くね？」

翠星石「……（あれ？ 私、無視されてねーですか？）」

シリアス苦手だから…。

t o b e c o n t i n u e d

薔薇水晶「セリフが…」

ローゼンたちは8、992ダメージ。ローゼン達は息絶えた。

ひぐらしメンバーは10、145ダメージ。ひぐらしメンバーは息絶えた。

東方メンバーはかすりつつ避けた。

霊夢「みんな！ 大丈夫!？」

真紅「……」

レナ「……」

その他「……」

魔理沙「くそっ！ お前、なんてことを!！」

魔理沙の攻撃。

魔理沙「ファイナルスパーク!！」

周りの物を破壊しつつ、光が相手へと一直線に飛んでいく。

魔理沙「死ねえええ!！」

雪華綺晶はひらりとかわした。薔薇水晶はひらりとかわした。

言葉は攻撃を吸収した。

霊夢「な…なんて奴なの…。こんなの勝てるわけないじゃない…」

魔理沙「……………」

t o b e c o n t i n u e d

?「グスツ…ひつく…」ペタペタペタ…

言葉「誰? そこにいるのは」

暗闇から足音が響く。

?「誰かいるの?」

雪華綺晶「誰なのかねえ。期待」

なおも暗闇から足音。そしてだんだんと音が大きくなり…、現れたのは…。

?「お姉ちゃん達、誰?」

魔理沙「フラン!?」

フラン「魔理沙! 霊夢も!」

霊夢「あんたいたの!?!」

雪華綺晶「かわいい子キター!!!」

薔薇水晶「バカ…静かに…」

雪華綺晶の攻撃。

雪華綺晶「ビームサー・・・」

パリンツ…とはいかないが、それくらいに軽やかな音になった。

粉々に砕けた人形、雪華綺晶。

薔薇水晶「！！ 何をした…！！」

魔理沙「フ란の能力発動だな」

フ란「コワレちゃった」

霊夢「いいわフ란！ そのままあいつらと遊んであげて」

フ란「遊んでくれるの？」

薔薇水晶「（この能力…侮れない…）」

言葉「行きなさい、薔薇水晶」

薔薇水晶「！！ はい…」

フ란「あなたが次の遊び相手？」

薔薇水晶「…いくわよ…」

薔薇水晶の攻撃。

薔薇水晶「不滅「フェニックスの尾」」

「フリン」「禁忌」「カゴメカゴメ」「

2つの弾幕のぶつかり合い。勝つのはもちろん…。

t o b e c o n t i n u e d

↳ don't mix danger ↳ 56 (前書き)

物語としてはこれがラストです。

薔薇水晶「くっ…強い…」

フラン「まだコワレちゃダメだよ？」

秘弾「そして誰もいなくなるか？」

薔薇水晶「！！消えた…？何…この密度…」

霊夢「レベルが違うわ…」

その時。

薔薇水晶「くっ…うわあああああああ！！！」

魔理沙「やったぜ！」

薔薇水晶「この…私が………」

フラン「もうおしまい？ ツマラナイね」

言葉「本当につまらないわね」

霊夢「そいつはあなたの仲間じゃないの？ どうしてそんな言い方…」

言葉「弱い奴は仲間じゃないわ。道具よ」

↳ don't mix danger ↳ ending

作者「いや、ここまで長かったですねえ。どうでしたでしょうか？」

翠星石「翠星石を空気にすんなです！ このクソチビ作者！！」

作者「まあまあ、落ち着いて」

圭一「いいじゃねえか。俺たちなんか死んでるんだぞ」

霊夢「結局ほとんど全員死んでるしね」

真紅「どういう事が、説明してもらおうかしら？」

作者「ああいう終わり方が大好きなんです」

言葉「皆さん、お疲れ様です」

水銀燈「あんたのせいよ！」

雪華綺晶「まあ落ち着けよ」

言葉「そういう物語なんですから…仕方ないじゃないですか」

レナ「東方のネタが多かった気がするね」

魅音「特に最後の方ね」

作者「東方好きですよ。きちんとした東方二次創作も書きたいです」

レナ「魅いちちゃんは詩いちちゃんだったのかな？　かな？」

作者「そ、それは…その…あの…。み、魅音さんは魅音さんですよ？」

魅音「…」

レナ「へえ〜……」

作者「えっと…あと誰か喋りたい人いますか？」

魔理沙「その後の話とかあるのか？」

作者「今作るなら…そうですね」

世界は、城の主である桂言葉によって支配された。

人々は恐怖におびえ、確実に人口を減らしていった。

村や町では『勇者一行が殺された』との噂が広まった。

そんな中、言葉はある物を発見する。

『異世界移動装置』いわば、ワープ道具であった。

そんな代物を使わないはずがなく…。

作者「こんな感じでどうでしょう?」

言葉「今度は私が主演ですか?」

作者「未定ですけどね。それでは皆様、長い台本を読んでもくださり、本当に…」

トミー「僕はいつまでも皆のトミーだからねっ!」

↳ don't mix danger ↳ ending (後書き)

と、言うわけで。

こんなにも長い台本を読んでくださり、本当にありがとうございました。

この物語が書かれたのが、今から2年前。高校2年の時です。文章も雑でセリフばかりですが、これが作者人生の始まりと言っても過言ではありません。

生暖かい目で見守ってくれた皆様、「こんなクソ作者いない方がいいのに」というツンデレさん。

ご愛読ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0633o/>

~ don't mix danger ~

2011年4月21日12時44分発行